

黒田官兵衛と井上周防⑪

石垣原合戦5

岡垣歴史文化研究会 羽山 健一

『黒田家臣傳』（貝原益軒著）は、黒田家草創期の家臣27名の伝記で、最初に「井上周防傳」を載せている。その中に「慶長五年、如水に従て豊後に赴き、大友義統の先手吉弘加兵衛尉統幸と鎧を合て打勝、付従ひし軍勢を追散し、其名天下に高し」とある。井上九郎右衛門と大友の侍大将吉弘嘉兵衛の鎧合わせ（一騎打）は、石垣原合戦の劇的な場面として語り継がれた、有名な話である。

吉弘嘉兵衛は、豊後大友氏の初代能直を祖とする吉弘家の当主で、屋山城主であった。慶長の役で、敵の軍旗を奪う大功を挙げ、豊臣秀吉から一对の朱柄の鎧を賜った。朱柄の鎧は、特別武勇に秀でた者だけが所持を許された鎧で、武将の誉れとされていた。よって、嘉兵衛を鎧の名手とする所以である。大友吉統が豊後国を

改易された時、嘉兵衛は浪人となり豊前中津に滞在した。その後、従兄弟で柳川城主の立花宗茂に2000石で仕えたのである。

1600（慶長5）年4月、徳川家康が会津討伐を決めた時、大友吉統の嫡男能乗は徳川秀忠に属していた。それを知った嘉兵衛は、能乗を支えるため、主君宗茂に暇乞いをして、関東を目指したのである。その途上、豊後討入りのため西下する吉統と周防上関で対面した。嘉兵衛は、吉統に西軍加担の非を説き、東軍に味方するよう説得した。しかし、吉統は聞き入れなかったのである。嘉兵衛は、吉統を見捨てることができず、関東行きを諦め、運命を共にする道を選んだのである。

衛門は鎌鎧（一説に十文字鎧）で対した。両者は徒で互いに鎧を繰り出して戦った。嘉兵衛の鎧は、九郎右衛門の鎧の胸板に何度も当てたが、鎧を通すことができなかつた。そして、九郎右衛門が繰り出した鎧の鎌が、嘉兵衛の左頬を深くえぐり、兜の緒を断ち切った。弾みで兜が前にズレて視界を遮つたのである。たまらず嘉兵衛は鎧を横に払いつつ、後退した。この一瞬の隙を九郎右衛門は見逃さなかつた。鎧の弱点である左脇の下に深く鎧を入れたのである。嘉兵衛は、長時間の戦闘で体力を消耗し、2カ所の深手の大量出血で、瀕死の重傷を負ったのである。嘉兵衛の家臣達は、主人を敵に捕られまいと必死の抵抗をして、戦場離脱を図つた。しかし、乱戦の中、その家臣も1人2人と討たれ、嘉兵衛の守りが手薄になった時、小栗次右衛門が組み付き首を取つたのである。大友家に忠義を貫いた

吉弘嘉兵衛の壮絶な最後である。享年38歳であった。小栗次右衛門は、黒田2番備の侍大将後藤太郎助（後藤又兵衛の嫡男）の家臣である。

大友方は、嘉兵衛と宗像掃部の両大将を討たれ、多数の死傷者を出して、立石に敗走したのである。これで合戦は終結した。

合戦後、嘉兵衛の亡骸は、地元の僧侶や里人が丁寧に葬り、塚を築いてお祀りした。その後、それを知った熊本城主細川忠興が、石の祠を建て墓所を整備して、勇者の霊をお祀りしたのである。大友家に最後の最後まで忠義を尽くした「武士の鑑」吉弘嘉兵衛統幸の墓所は、参詣する人が絶えず今日に至るのである。



▲吉弘嘉兵衛統幸